東京交響楽団
楽団員が語る
名曲のツボ
Vol.61

Requiem
Wolfgang Amadeus Mozart
モーツァルト作曲 レクイエム

合唱と共に動くトロンボーン・セクション
2番奏者が吹く「不思議なラッパ」のソロは純粋な音色で

©N. Ikegami

トロンボーン奏者
住川 佳祐
Keisuke Sumikawa

モーツァルトの時代、トロンボーンは宗教曲やオペラで使われる楽器でした。モーツァルトは、交響曲ではトロンボーンを全く使用していないものの、ほとんどの宗教曲ではトロンボーンが3本使用され、「レクイエム」もその1曲です。

トロンボーン・セクションといえば、コラールを吹くなど普段は3人で同じ動きをして和音を奏でることが多いのですが、「レクイエム」では3人が異なる動きをします。というのも、トロンボーンは合唱を支える役割をしていて、1番奏者は合唱のアルト、2番奏者はテノール、3番奏者はバスのパートと一緒に動くのです。「キリエ」で合唱はフーガを歌いますが、あの細かい音符をトロンボーンも一緒に吹きます。一般的にトロンボーンは他楽器に比べ、演奏するまでの待ち時間が長い楽器なのですが、「レクイエム」はトロンボーンにほとんど休みがないという珍しい作品です。

そんなトロンボーンがソロを演奏する曲があります。「トゥーバ・ミルム(不思議なラッパ)」という、最後の審判について歌う曲です。これはオーケストラスタディとして学生時代から必ず練習する曲で、オーディションでも課題曲として絶対に出るという、トロンボーン吹きにとって必須の曲。これを吹くのは1番奏者ではなく2番奏者です。トロンボーン・ソロと絡むのがバリトン独唱、テノール独唱なので音域的に2番奏者だと理解できるのですが、それでもなぜ2番奏者にソロを……とは思ってしまいます。このソロは何回吹いても緊張します。というのも、その前の曲「ディエス・イレ(怒りの日)」は曲の最後までテンション高く吹いて、息つく間もなく、穏やかな「トゥーバ・ミルム」を吹かねばならないので、その切り替えが難しいのです。

このソロを吹くときは、余計なことはせず、純粋な音色で、いい意味で淡々と演奏しようと心がけています。ただ、バリトン独唱が歌い始めた直後、フレーズの頂点の実音ラ♭がトロンボーンという楽器にとって少々苦手な音で、なおかつフレーズ的に頂点の音を突出させたくない……など考えてしまうと、息が止まって上手く音が出なくなることも。ちゃんと吹けて当たり前、少しでもおかしいと目立ってしまうという一番イヤなパターンの曲なのです(笑)。

合唱と共に動くトロンボーンが、本来のトロンボーンらしくコラールを奏でる唯一の箇所が「コンフターティス(呪われた者たちが)」の最後。アーメン終止など、宗教曲独特の和声感が僕は好きなのですが、ここもやはり音程が取りにくく、音量も控えめにしなくてはならないという難関の箇所でもあります。

ノット監督の指揮でモーツァルトを演奏するのは、僕は今回が初めて。東響トロンボーン・セクションは普段アメリカの楽器を使っているのですが、ノット監督からドイツ管を使いたいとリクエストが来ているとのこと。弦楽器もかなりの小編成になりそうです。ノット監督の音楽はいつも想像を2回ぐらい超えてくるので、一体どんな「レクイエム」になるのか……どうぞご期待ください!

Österreich Werbung.
Photographer : Hans Wiesenhofer

死者のためのミサ曲「レクイエム」はモーツァルトの絶筆の作品で、「ラクリモサ(涙にくれる、その日)」冒頭を書き記してモーツァルトは1791年12月に亡くなりました。その後、妻コンスタンツェの依頼を受けてフランツ・クサーヴァー・ジュースマイヤーが補筆完成し、1793年に初演。10月の「名曲全集」もジュースマイヤー版で演奏する予定です。

ミューザ川崎シンフォニーホール
&東京交響楽団
名曲全集 第170回
The Masterpiece Classics Series No.170
2021年10月24日(日) 14:00開演

指揮:ジョナサン・ノット
ソプラノ:カタリーナ・コンラーディ
アルト:ウィープケ・レームクール
テノール:マーティン・ミッタールッツナー
バスバリトン:ニール・デイヴィス　合唱:新国立劇場合唱団
■デュティユー:交響曲 第1番　■モーツァルト:レクイエム K. 626

◎友の会料金　S 6,300円　A 5,400円　B 3,600円　C 2,700円　◎当日学生券(25歳以下の学生) 1,000円(要問合せ)